

荒川放水路は今年の10月12日に通水100周年を迎えます。1930年(昭和5)年に完成して以来、一度も決壊することなく人々の暮らしを守り続ける荒川放水路。そこには、膨大な時間と人々の苦勞の末に誕生した歴史がありました。



人々の願いが詰まった荒川放水路



地図の左下(東京都北区に位置する現在の旧岩淵水門)から右上(東京湾)にかけて引かれた赤い太線が荒川放水路にあたる。「荒川下流改修工事平面圖」提供:土木学会附属土木図書館/JSPS科研費 258038)

地球温暖化などによる異常気象で近年増え続ける水害。2019年10月、東日本を中心に多くの被害をもたらした台風19号の日本上陸も記憶に新しいことだろう。その際、荒川、隅田川の被害を最小限に防いでくれたのが荒川放水路である。

人々の暮らしを一気に奪う水害。明治時代、東京の下町に暮らす人たちも度重なる水害に頭を悩ませていた。被害を減らし、安心して暮らしたい。そんな願いをかなえるために荒川放水路は作られた。北区・岩淵より下流の部分で元々荒川が流れていた場所は残したまま、東側の土地を工事によって新しく川を作ることで、増水時に水を送るという巨大なプロジェクトである。

中でも最重要とされたのが、岩淵水門である。荒川が隅田川と荒川放水路の2つに分かれる、隅田川側の入り口に設置。隅田川から水があふれだしそうなとき、水門を閉じて洪水を防ぐのが目的だ。その岩淵水門の通水式が行われてから今年で100年を迎える。荒川放水路の完成によって水害は軽減し、人々に安心な暮らしをもたらしている。

人の手によって作られた荒川放水路

関東平野中央部から東京湾に流れる荒川。農村地帯だった荒川下流一帯は明治時代に入ると、その光景は一変する。欧米諸国に対抗するためセメント工場や化学肥料工場など多くの工場が建ち並ぶようになった。当時は、まだ鉄道が開通したばかりで、多くの輸送には船を使わざるを得なかったからだ。

その一方で「荒ぶる川」の名の通り、多くの水害に襲われていた。1910(明治43)年8月の大水害では、壊滅的な被害に見舞われた。こうした被害を減らすべく声があがったのが荒川放水路の建設である。建設にあたり約1300軒の家が移転を強いられたため、反対の声もあがったが、移転を執行してまで作りたいという国家の強い意志がそこに表れていた。

1913(大正2)年に建設が始まった。全長22km、川幅は約580mにも及ぶ大工事である。アメリカやイギリスから機関車や掘削機や浚渫船を購入し現場に導入したが、最初のころは馬車による土砂や石を運ぶなど多くの人の手によって掘り進められていった。

こうして1924(大正13)年に完成、荒川放水路通水式が岩淵水門右岸堤で行われた。当時の加藤高明首相をはじめ主要な閣僚が出席したことから水門の完成の意義深さを物語っている。



「荒川放水路通水式」(提供:国土交通省 荒川下流河川事務所)

建設の立役者 あお やま あきら 青山 士



あお やま あきら
青山 士

(提供：土木学会附属土木図書館)

荒川放水路を建設するうえで、最難関の工事が岩淵水門である。軟弱な地盤に水門を作らなければならない。その難題に対して設計から工事まで携わったのがパナマ運河建設に日本人で唯一関わったのが青山士(あおやま・あきら)である。

青山は岩淵水門の設計の際にこだわったのは“強固で頑丈”であること。そこで、基礎を杭打ちにし、その上に鉄筋コンクリートの広い床板をのせる方法を提案した。「そこまで頑丈にする必要があるのか」と猛批判を浴びたが、妥協案として杭打ちではなく井筒基礎とし、鉄筋コンクリート床板と平板を併用する案が採用された。実際、基礎は川底よりさらに20mの深さに鉄筋コンクリートの枠を6個埋めて固めている。当時では非常に珍しかった。青山の思惑通り、1923(大正12)年におきた関東大震災では、岩淵水門には大きな被害はなかったという。

また、青山は洋服で腰には手ぬぐいをし、ゲートル※をまき、たびたび現場に姿を現した。泥まみれになりながら作業者とともにも早朝から汗を流した。時には食事を作業者にふるまうなど仲間意識がとて強かったという。それだけ岩淵水門の建設に全身全霊を注いでいたのだろう。

最高責任者であり、功労者でもある青山だが、荒川放水路が完成した記念碑にはその名は刻まれていない。「巨大な土木事業は関係者全員で作りに上げていくものである」という青山の精神がそこにも表れている。完成後も梅雨や台風などで川が増水すると、雨に打たれながら雨がっぱにゴム長靴で水門を見に行くほど岩淵水門に対する思いは強かった。

※ ゲートル… 脚絆に似た、すねに巻いて使用する服装品

人々を水害から守る

その後、現在の「旧岩淵水門」にあたる岩淵水門は、老朽化により1982年にすぐ下流に改築した新たな岩淵水門に役目をバトンタッチした。赤い塗料を塗られていることから「赤水門」といわれた旧岩淵水門に対し、新しい水門は「青水門」として親しまれている。輸送手段が船から鉄道に変わり、さらに自動車も加わったことで

荒川放水路の建設が始まった当時に比べて川の役割は大きく変わったかもしれない。それでも川はその街に暮らす人たちにとって欠かせないものであり、自然を感じる憩いの場として大きな存在感を放っている。だから荒川放水路が人々を水害から守っていく大きな存在であることは100年前もこれからも変わらない。



左/旧岩淵水門(赤水門) 右/現在の岩淵水門(青水門) (提供：国土交通省 荒川下流河川事務所)

荒川放水路通水100周年 アニバーサリーフェスの開催案内

荒川放水路が今年で通水100周年を迎えることを記念し、様々な企画が進行中です。通水100周年当日の10月12日(土)には、「荒川放水路通水100周年アニバーサリーフェス」として、岩淵水門操作室見学や災害対策車両の展示、荒川知水資料館ではカフェ、河川敷ではキッチンカーなど、誰もが楽しめるイベントを開催します。

<https://www.ara-amoa.com/arakawa100th/>



参考文献

- ・長谷川敦「人がつくった川・荒川」旬報社 2022年
- ・竹林征三「物語『日本の治水史』」鹿島出版会 2017年
- ・「荒川放水路と青山士」荒川知水資料館 1999年
- ・高崎哲郎「評伝 技師・青山士の生涯 われ川と共に生き、川と共に死す」講談社 1994年